

山茶碗の用途をめぐって —摩滅痕の分析から—

● 武部 真木

東海地域に特有の中世食膳具とされてきた無釉の陶器「山茶碗」は、中世前期の膨大な消費量に対して中世後期には一転して全く流通しない地域が生じるなど地域単位でその様相は大きく変化している。ここでは山茶碗に認められる摩滅の痕跡を「使用痕」と考え、型式ごとの変化を分析することによって使用形態という視点から中世前期と後期の山茶碗の違いを抽出した。そして山茶碗は単なる「食膳具」ではなく、使用方法と山茶碗の形態変化が相互に関連してきたことを想定した。

はじめに

東海地方の中世陶器の主要な位置を占める「山茶碗」の基本的な流通域は、旧飛騨、伊賀、伊豆国を除く東海地域にほぼ限定される。知多半島・猿投・瀬戸・渥美・湖西・東遠・美濃中部・東部地域の各地の生産地編年研究が進展したことにより、少なくとも12世紀から15世紀末の間における流通域内部で起った地域差といったものがしだいに明らかにされつつある。消費地の様相には、生産地からの距離が常に影響し、各窯生産量の推移が製品の競合関係となって流通域に即座に反映されることがわかってきている。これは「山茶碗」が比較的狭い「在地」消費を目的とした製品であったことを浮彫りにしている。

このような特徴をもつ「山茶碗」の生産・流通における地域間の格差、および画期からその背景を考えようとするとき、そもそも「山茶碗とは何か」という根本的な課題が敢て提示されることがある。それは膨大な消費量と等量（等価）の代替品が確定できないがために「食膳具（食器）」という自明の前提に対し、ふと、あるいは強い疑念として表現されてきた。本稿では「山茶碗」の用途や機能といった問題について過去の論点を整理し、併せて「使用痕」を採用する試みを研究ノートとして提示しておきたい。

1 用途についての言及

山茶碗研究においても草分である赤塚幹也氏は「山茶碗は実用の飲食器で、小皿には菜（おまわり、おめぐり）を盛るか調味料を入れた。」（註1）とし、また1969年『瀬戸市史 陶磁編一』「山茶碗の名称と概説」（註2）には平安から鎌倉時代にかけて続いた食膳の場景として「山茶碗は、これに飯を盛りあげ、周りに小碗（または小皿）を配して、そこには菜や調味料を入れ、それらを折敷か高脚台に載せて膳部とした。」という食膳の様子を想定した。ただし、食器の材質は陶器に限らず漆器・木器の使用も多かったであろうと補足している。

赤羽一郎氏は1987年「山茶碗に関する若干の考察」（註3）において、山茶碗の食膳具としての役割に疑問を提示した。雑穀を米と混ぜ雑炊状にして食べることが一般であったとされる当時の食習慣から類推すれば、水を含むと脆弱になるという性質や、山茶碗も灰釉碗も口をつける食べ方に適さないといった点から「主要な食器としてみなすことに若干の躊躇」を覚える」とする。また、信濃へ搬入された古代灰釉碗と中世山茶碗の量の格差から、古代～中世にかけて両者の日常雑器としての連続性を否定し、灰釉碗の特殊器種性を示唆する鋤柄俊夫氏の考察（註4）を紹介し、両者の性格の違いが受け入れ量の差違となってあらわれるという考えに一定

の理解を示しつつ、食器の主流は実は漆器や木製品であり、そのため信濃では食器として積極的に山茶碗を求めなかったとしている。さらに「山茶碗・土師器質土器は、多分に一過性の用途をもっていた」として、「日常」の食器であることを否定している。

今日、山茶碗を扱うにはまず藤澤良祐氏による研究成果に負うところが大きい。氏は山茶碗を食膳具として捉える。その上で、山茶碗の減少する時期と量産期が一致する（施釉陶器）平碗は技術的および質的な差違が大きく、しかも流通圏が異なること、出土量が山茶碗の消費量に遠く及ばないことなどをあげ、瀬戸（施釉陶器）の中には代替品が求められないことを示した。そして土器・陶磁器類のやきもの以外—すなわち漆器・木製挽物—を想定した（註5）。

城ヶ谷和広氏は、中世前期を中心とする集落遺跡である土田遺跡の陶器・土器の器種構成を時期別に示し、供膳具である碗形態の中で、山茶碗が土田Ⅰ期～Ⅳ期（藤澤編年尾張型第4型式～脇之島Ⅰ号窯式）の間を通して、圧倒的な量を占めることをあげ、漆器など木製品は、高級品としての使用・汁ものを入れる場合などの補完的な使用は想定できるが、やはり日常容器としては山茶碗を用いたと想定した。ただ「調理具」の節では「山茶碗でわずかではあるが、卸目や片口をもつものがみられ」「内面が非常に摩滅しているものがしばしば見られる」点に注目し、「単に供膳具のみでなく、鉢のようなもの（調理具）としての用途」をもっていた可能性を指摘している（註6）。

尾野善裕氏は、尾張地域の＜一般的状況＞として、山茶碗が出土土器・陶磁器全体の八割を占めることを示した。そして「異常ともみえる多さ」をはじめ、食膳具とした場合の代替品と目される14世紀の瀬戸（施釉陶器）の増加率が12・13世紀の山茶碗の比率に達しないこと、木製挽物の普及が飛躍的に増加するのは15世紀後半以降であり、山茶碗の減少する時期と隔たりがあること、多くの（1/4程度の割合で）山茶碗の内面底部に通常の飲食によるものとは考えにくい著しい摩耗の痕跡がみられることなどから、すべてを日常の食器とみなすことを疑問視し、（現段階の見通しと断った上で）調理

具的な使用を想定している。そして山茶碗の減少は瀬戸（施釉陶器）卸皿など調理用器種の量産化の時期とほぼ一致することを指摘した（註7）。

以上を整理すると山茶碗という器種が成立する段階において、灰釉陶器碗さらには白磁碗に形態の系譜が求められてきたこともあり（註8）、当然のことながら「碗」であることは自明の事と受け止められてきている。これまでの山茶碗を「供膳具（食器）」とする場合、その代替品には中世絵巻物に描かれる多くの漆器・木製品資料や、漆塗りの工程を簡素化した廉価な木地碗が生産されていた事例（註9）などをもとに、出土資料に見られる以上の普及率を予想する考え方が一般的である。一方、食器以外とみる場合には、「調理具」と仮定する場合や、山茶碗の使用の痕跡に留意した報告は数多くみられる。

2 山茶碗にみられる使用痕

使用法をさぐるために使用の痕跡を取り上げる。消費地遺跡でみられる使用痕の中には、磨滅の痕跡をはじめ、墨書、ススやタール、漆などの付着物などがある。

まず、墨書がされる部位は碗・小皿ともに外面底部が圧倒的に多く、内容では数を表すもの、記号など1文字である場合がほとんどである。また、墨書のある資料は高台部分に磨滅の痕跡が認められるものはなく、一過性の使用法であったと推定されている（註10）。墨書陶器は屋敷地周辺のほか集落に近い河道などに分布が集中する傾向があり、尾張地域においては尾張型と東濃型の両者の山茶碗で文字の内容に際立った差違は認められない。また、中世前期の集落で「僧」「佛」「進上」「犬法師」などが確認されているが（註11）、これらは例外的でさらに特殊な場での使用法が想定される。

ススの付着する資料は、井戸・土坑や溝や流路に一括廃棄された中に含まれている場合がある。ほぼ全面に大量に認められるものがあり、しかも破断面をススが覆うものが多々みられる。器の呈をなしていない状態で熱を受けており、この場合は使用痕ではなく最終的な廃棄方

法を示す痕跡といえる。一方、口縁部周辺のみ部分的にススが付着するものがあり、こちらは灯明皿のような使用法が想定される。その他、漆と思われる被膜状の付着物が主に内面に残る場合がある。接着部が弱く剥離しやすいため、遺存の確率がかなり低い痕跡であり、複数がまとまって出土する例もなく、用途など全く不明である。

以上の墨書やスス、漆などの付着物は、どちらかといえば特殊な用途で例外的なもの、あるいは転用など再利用の痕跡というべきものであり、大量消費という特性に結びつく用途ではない。次に「磨滅」の痕跡をとりあげることにする。

3 磨滅の痕跡について

尾張地域の消費地遺跡出土の山茶碗を分析の対象とする。この地域は中世前半期は尾張型、後半期にも東濃型山茶碗が流通し中世を通して追跡することができるためである。まず、磨滅のみられる部位について図1のように分類を行った(註12)。

まず外面は高台皿付、または平底の底部周囲が磨滅するもの(a類)、磨滅しないもの(b類)に分けられる(註13)。内面では見込が磨滅するものをA類とし、全体に及ぶA-1類、見込と上部の口縁近くに顕著なA-2類、見込部分のみのA-3類に細分する。B類は内面の見込を除いた部分に磨滅が認められるものであり、

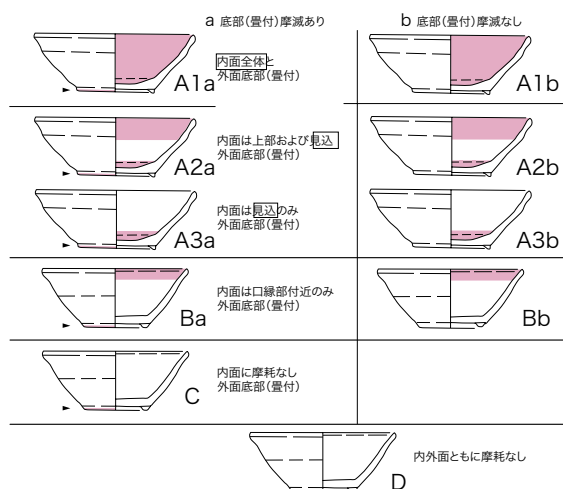


図1 磨滅部位の分類

C類は高台には磨滅が認められるが内面が磨滅しないもの、そして全く磨滅が認められないものをD類とする。

これにしたがって山茶碗を型式ごとに観察した結果が表1、および図2である。

大毛池田遺跡(一宮市)は木曽川左岸の沖積低地に立地し、12世紀後半から16世紀初頭にかけての屋敷地区画など集落の中心域が調査された。掲載資料では、尾張型第4,5型式段階では9割以上がA類、すなわち内面見込に磨滅が認められる。そして第6型式ではA類が60%、第7型式になると10%弱と極端に減少する。東濃型山茶碗は胎土が緻密で硬質の焼成であるため、元々表面は滑らかでかつ磨滅も少ない可能性が考えられるが、手触りと高台に残るモミ痕が擦れて変形していることで確認することができる。A類をみると、窯洞1号窯段階(第5型式併行)で6点のうち3点、白土原1号窯段階(同第6型式)では8点のうち5点、明和1号窯段階(同第7型式)では5点のうち3点といった比率となり、必ずしも尾張型での検出率とは一致していないようである。図4は山茶碗に先行する百代寺窯式段階の灰釉碗と輪花碗の磨滅部位を示したものである。ここでは掲載資料8点すべての内面と高台に著しい磨滅が認められた。山茶碗とは違い、器壁は薄く胎土は緻密でやや軟質の焼成ではあるが、磨滅は同様の部位で確認されている。

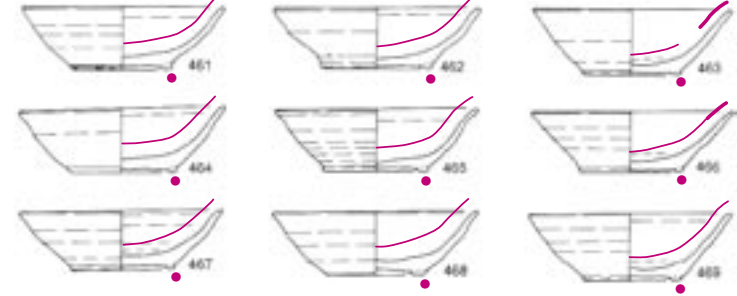
志賀公園遺跡(名古屋市北区)は矢田川と庄内川の合流地点から1km程南にあたる沖積地に立地している。調査範囲は中世段階では集落の外縁部にあたり、山茶碗は主に村境付近の溝および自然流路から多数出土している。96ASD06の山茶碗は主に尾張型で構成されており、A類は第5型式段階で72.4%、第6型式段階は71.4%とほぼ同様の割合で推移し、第7型式段階で13.3%と急激に減少する。

猫島遺跡(一宮市)は中世段階は区画溝、掘立柱建物、調査範囲東側の低湿地には方形土坑が検出されるなど集落でも縁辺であったと思われる。山茶碗は東濃型が主体となっている。A類は白土原1号窯段階が0%、明和1号窯段階で40%である。傾向は抽出し辛いものの、東濃型では高台が磨滅する比率は少ないようであ

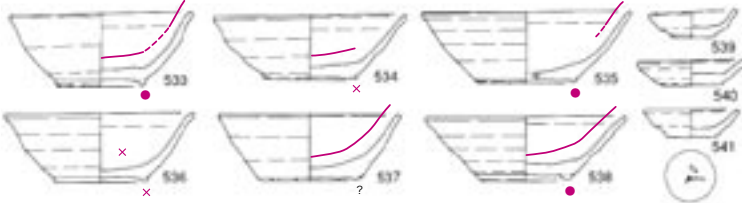
95E SE01



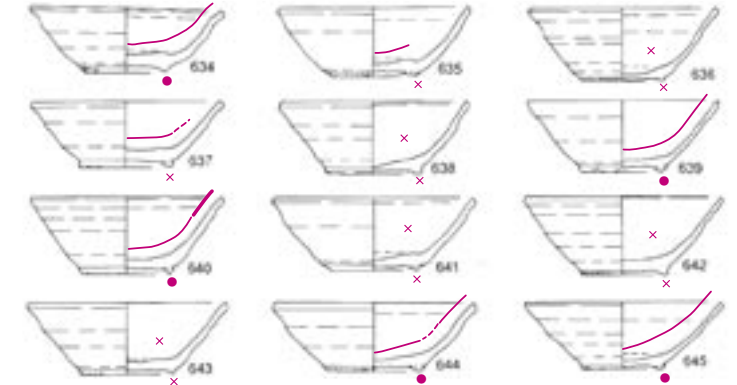
94K SK56



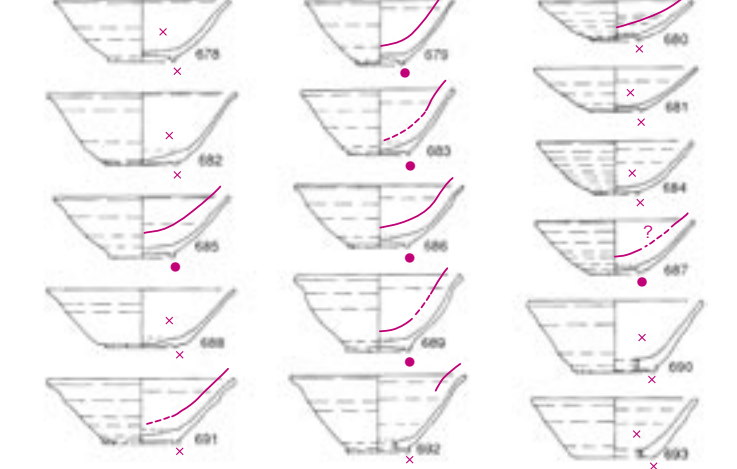
94Aa SK55



94C SK10



95F SD01



● 高台置付に摩滅が認められるもの — 摩滅部分を示す。太線は特に著しいもの

図2 消費地出土の山茶碗にみられる摩滅痕（大毛池田遺跡）

大毛池田遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
百代寺	6		1		1						8
第4型式	3				1	1					5
第5型式	39		2		1	2	1			3	48
窯洞1	2				1					3	6
第6型式	4	1	2		2	3	1	1	1	5	20
白土原1	3	1	1					1		2	8
第7型式		1								10	11
明和1	2		1				1	1			5
第8型式										1	1
大畑大洞古	1									2	3
大畑大洞新			1							1	2
大洞東		1								1	2

志賀公園遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
第5型式	3	1	7	3	7		1	2	3	2	29
第6型式		2	6	1	7	4	2		1	5	28
第7型式						2	2	2	1	8	15

猫島遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
第4型式		1								1	2
第5型式	1										1
第6型式										1	1
白土原1								1		2	3
明和1	1	1						1		2	5
大畑大洞古		1									1
大畑大洞新							1				1
大洞東										1	1

松河戸遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
百代寺					1						1
第4型式	4		3		3					6	16
第5型式	28		4		5		1	2	1	9	50
窯洞1	1										1
第6型式	9	2	3		3	1	1	1	5	13	38
白土原1					2			1		2	5
第7型式	1	2			1		1	1		15	21
明和1	1						1	2	1	14	19
第8型式										2	2
大畑大洞古									2	4	6
大畑大洞新										1	1
大洞東										2	2
脇之島									2	2	4

表1 摩滅の部位

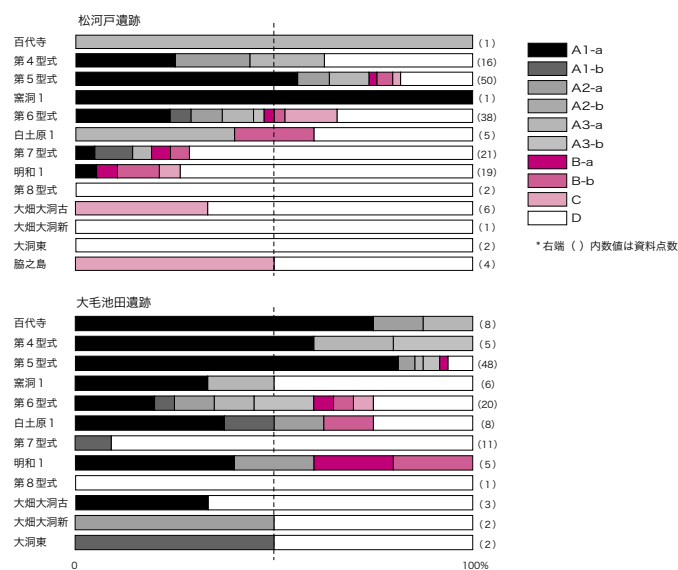
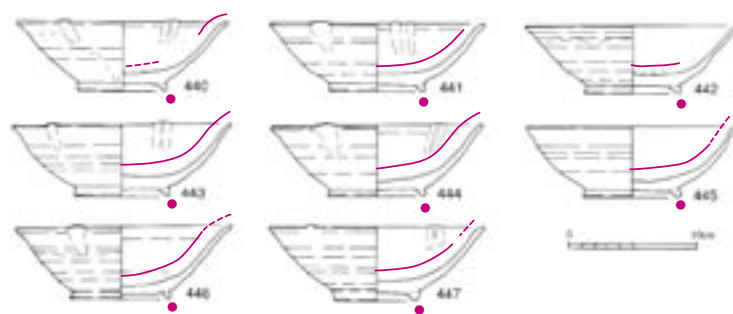


図3 摩滅部位の変化

94F SD17



● 高台置付に摩滅が認められるもの
 — 摩滅部分を示す。太線は特に著しいもの

図4 灰釉陶器碗にみられる摩滅痕（大毛池田遺跡）

る。

松河戸遺跡（春日井市）は庄内川右岸の沖積低地に立地し、調査地点は中世集落と縁辺部の水田耕作地にあたる。山茶碗は尾張型・東濃型の両者があり、A類は尾張型第5型式段階資料50点のうち37点（74%）、第6型式段階は38点のうち18点（47%）、第7型式では21点のうち4点（19%）と急激に減少する。東濃型、明和1号窯段階では19点中の1点のみ（5%）である。脇之島1号窯段階の無高台碗は、平底の周縁部に明瞭な摩滅痕がみられる。軟質の焼成であるためこうした痕跡が現れ易いと思われる。東濃型では内面に摩滅痕はほとんど認められない。

表2は三辻利一・岡本直久氏らが行った胎土分析試料の一覧（註14）から作成した。これによると、第3型式では13点中の7点（53.8%）、第4型式では40点中の28点（70%）の高い割合で内面見込に使用痕が認められる。中世前期に大型の屋敷地区画が並び、近在では中心的な集落遺跡であった朝日西遺跡（清須市）では、10点のうち摩滅は8点に認められる。一方、白山中世遺跡（春日井市）資料では摩滅が全く認められない。ここは祭祀遺跡と考えられており、15世紀代ではあるが東濃型山茶碗の大量投棄という特異な出土状況がみられ、山茶碗の「かわらけ」的な使用法が指摘されている。

下津北山遺跡（稲沢市）では中世前期の方形区画をもつ屋敷地が検出された。そこでは猿投産製品を主体とした水注や仏器を含む壺類、「僧」「佛」など特異な文字が墨書された山茶

碗、小皿が数多く出土し、寺院であった可能性が高いとされている。報告によると山茶碗と小皿の内面見込部分の摩耗について、I期（12世紀後半～13世紀前半）では碗203個体のうち77%、皿154個体のうち64%でみられ、遺構によっては90%近くの個体で認められた。II期（13世紀後半から14世紀）では全体の総数は1/4程度に減少するものの、碗では34%、皿では66%と皿の方に多く認められる。I期資料の特徴として「大量の一括廃棄資料においては摩耗が顕著なものが多く、未使用品を廃棄したようすはみられない」とし、I期からII期の変遷にともない碗皿の使用形態が変化した可能性を指摘している。なお、ここでのI期は主に尾張型第4、5型式段階、II期は第(6)7、8形式が主体となる時期に相当する（註15）。

見込部分を含む摩滅痕（A類）では、尾張型山茶碗では第3、4、5型式段階まで9割に近いかなりの高率で検出されるが、次の第6型式段階でやや減少する傾向があらわれ、第7型式段階では摩滅痕のない資料が大半を占めるよう

遺跡名	型式	個数	使用痕有り
白山中世遺跡	第2型式	1	0
	第3型式	5	0
	第4型式	2	0
町田遺跡	第3,4型式	1	0
	第4型式	6	内面2,高台1
朝日西	第3型式	7	内面4,内面高台2
	第4型式	3	内面高台1,高台1
廻間遺跡	第4型式	10	内面8
土田遺跡	第4型式	5	内面4
尾張国府跡	第4型式	5	内面1,内面高台1
	第5型式	1	0
大淵遺跡	第3型式	1	内面1
	第4型式	9	内面8,内面高台1

表2 山茶碗の摩滅痕（尾張型）

になりその割合は逆転している。東濃型山茶碗については分析点数が少なくまだ傾向を抽出するには至らないが、高台が摩滅痕しない資料 (b 類) の割合が尾張型より高い、という印象を持っている。

摩滅の部位についてみると、A 類では常に (a 類) > (b 類) の関係があり、見込部分の摩滅が顕著な資料は高台にも確認される場合が多い。一方で見込に摩滅のない資料 B-a 類と B-b 類では、高台の摩滅痕の有無がほぼ等しい関係にあり、口縁部摩滅の使用法の影響が特に看取できないとすれば、見込みが摩滅するような使用を継続することによって、高台部分にも摩滅痕が生じるという対応関係が想定されよう。

4 摩滅部位の意味するもの

山茶碗の形態、特に底部に限定してみるならば、高率で見込に摩滅痕が検出される尾張型山茶碗第 3 型式～第 5 型式の形状は、内面底部から体部は緩やかな曲線を描いて続く。底部の器壁は一定して厚く、この間に高台部分は量産による粗雑化が進み低くなるとはいえ、高台径の縮小傾向は抑えられている。第 5 型式新段階になると底部の器壁がやや薄くなり、厚さも一定でなくなる傾向がうかがわれる。摩滅資料の割合に変化がみられた第 6 型式碗の最大の特徴は、内面底部と体部の境が屈折して明瞭な稜を形成する点であり、体部の開きは小さくなり短く直線的になっていく。器高をほぼ据置きのまま口径・高台径ともに縮小化が進むため、全体のバランスに大きな変化がみられる。同時に底部の器壁は薄くなり明らかに一定でなくなる。以降第 7 型式～第 11 型式でも内面底部と体部の境はますます明瞭となり、器壁は薄くなっていく。

底部径の小型化、体部の直線化、底部・体部の境に稜を形成する、といった特徴は、大局的にながめれば一連の変化としてほぼ同じ段階で発生しており、知多窯では知多第 6 型式段階、渥美・湖西窯では第 3 型式第 2 小期、東濃型山茶碗では明和 1 号窯段階に見えてくる特徴である。各型式の併行関係からすると、この形態変化の出現する時期は若干前後して、13 世

紀第 2 四半期から第 3 四半期の間に相当する (註 16)。従来この変化は、量産化を目的に工程が省略化、粗雑化される過程の製作技法による変化と見做されてきたが、この量産化のピークを迎えた尾張型第 6 型式段階を境として、実は内面の摩滅痕は減少傾向にあり、それまでの使用法における需要が低下しつつあったとみることもでき、単純には説明できない。

見込部分を中心に広い範囲が「摩滅」するためには、播鉢の使用時にみられるような「する・つぶす」動作が最も想定し易い。内面底部が丸く、口は広く、かつ安定して設置できる方がより効率的となる。A-2 類は体部の丸く膨らむ中程が摩滅しないもので、この存在からは棒状の播粉木のような器具を用いた可能性も考えられる。摩滅痕の比率が減少する尾張型第 6 型式以降の山茶碗は、見込部分の形状や面積、底部の安定性からすれば想定される使用方法に適していない、といえようか。また、末期の灰釉陶器碗にも山茶碗と同様の用途への連続性をさぐる事が可能ではないだろうか。

ところで、東濃型山茶碗生産窯では「オロシ片口碗」「オロシ碗」「オロシ無高台碗」と分類される器種が微量ながら焼成されている (図 5)。片口碗は碗の口縁部に片口が作出されたもので、「オロシ碗」は内面体部や見込から口縁にむかって放射状や斜格子状、綾杉状に粗くへう描き線刻されるものであり、「オロシ無高台碗」は内面に斜格子状の線刻を施した無高台碗である。深く明瞭な線刻があり、両者はオロシ目としての機能を有した可能性がある。多治見市周辺では、白土原 1 号窯～大畑大洞 4 号窯段階の焼成器種としてこれらが含まれている (註 17)。生産量全体からすれば 1% にも及ばず、その後生産が継続した状況もみられないが、尾張型山茶碗の摩滅痕に変化が生じてくる時期に発生したという意味において注目したい事象である。

5 山茶碗とは何か

山茶碗は質において階層差を表現しない。性格や規模のことなる様々な居住域から出土しており、中世の集落ならほぼ「どこにでもある」

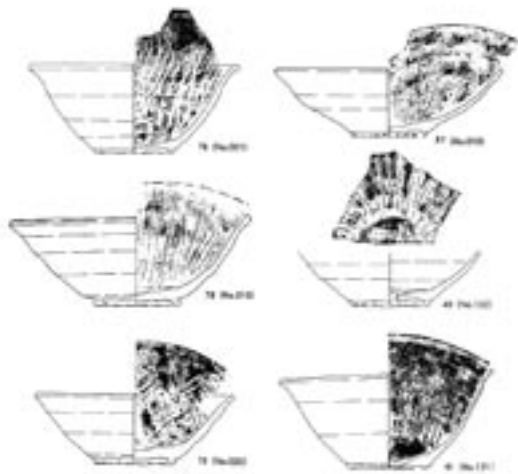


図5 卸目のある山茶碗

(76・77・78 浜井場3号窯、67 畝久田3号窯、40・41 大谷洞16号窯)

分布状況である。規模の大きな屋敷地区画で構成される朝日西遺跡は、碗・皿以外にも比較的多くの貿易陶磁器をもち、一般集落とは明らかな階層差が読み取れる地点である（註18）。山茶碗の出土量は突出して多い。しかし上質な山茶碗が存在する訳でなく、一般集落と全く同じモノである。もし食膳具と仮定するならば、基本となる碗形態が階層に関係なく共通することになる。非日常、あるいは階層差の表象という意味では、希少な貿易陶磁器、および古代において高級品とされた伝統をもつ漆器が最も相応しい。「どこにでもある」山茶碗は、集落の立地や性格、居住者の生業などに左右されず、ほぼ日常の普遍的な行為に関連する。とすれば、やはり―「食」に関連するもの―であった可能性は高いと思われる。

今回提示した山茶碗内面の摩滅痕について、表現の一般化が難しく、「手触り」という極めて主観的な感覚で判別を行っているのが現状である。ただ、調査・整理の現場においては多く共感を得られる経験ではないかと思っている。そうした欠点を課題としつつも以上の分析から、尾張型第5型式段階までの山茶碗の第一義は「食膳具」ではなく―食に関連する―「道具」と考えたい。

まとめにかえて

山茶碗の使用痕、なかでも摩滅の痕跡から

山茶碗の使用方法を推定した。そして尾張型第6型式を境にした画期が存在することがわかった。生産・流通の様相をみると、この段階までに尾張型山茶碗の生産は増加しピークを迎える。瀬戸地域内では、主要な窯跡分布の移動がみられ、東濃型の第5型式から尾張型の第6型式の生産へと変換する（註19）。以降の生産は縮小に転じ尾張北・西部地域では代わって東濃型山茶碗の割合が増加し、西三河地域では13世紀後半に急激に減少しはじめ、東三河地域では他地域に先がけて流通なくなる、という現象がみられる。東海地域全体で生産地の競合関係が大きく変化する時期といえる。使用方法にも明らかな変化がみられ、これは山茶碗の役割が変質していった重要な画期であると考えている。

これまでに山茶碗の役割を単純に肩代わりする代替品が復元されなかったのは、おそらく求められていた「機能」そのものが時代とともに変化したためでもあろう。一括して「山茶碗」と呼ばれている器種であるが、尾張型6型式以降と以前は違うモノである、との認識である。

では「調理具」ではなく―食に関連する―道具と曖昧な表現としたのはなぜか。山茶碗の容量と消費量を考えると、少量分の調理を頻繁に行うことを目的としたと推定される。ある程度の量の調理には「こねる」機能も発達した搗目のない片口鉢が同時に存在している。これらには山茶碗以上に顕著な摩滅痕が認められる場合があり、山茶碗より耐久性があり長期間使用されたとみることもできる。すると山茶碗の一部には搗鉢のような機能を同時に小単位に適用するという役割を規定することができる。すなわち、調理する「道具」と「食器」的な要素（形態とサイズ）の両者が未分化な状態、「碗形態の道具」である。これが「山茶碗」を特異なものにしている特徴であろう。そして山茶碗に特有の使用形態はある時期まで主要な流通圏で共有されていたとみることができる。

東海地域以外の遠隔地で山茶碗がどのように搬入されていたのか、信濃の状況を参考にあげておきたい。

鋤柄氏は「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」（註20）で、長野県南部地域（伊那・

木曾・松本・諏訪地区)の東海系窯業生産の影響の変化を示している。この中で、12世紀の日常雑器を代表する碗・皿類のうち山茶碗は、前代の折戸53号窯期に興隆し大量に搬入された灰釉陶器と比較して出土量が極めて少なく、この時期は骨蔵器等の特殊品を除いて搬入されたのは食膳具の一部に限られ、調理具・貯蔵具等は多くが平安時代以降の系譜をひく在地系製品であったとされる。また12世紀末から13世紀にかけても山茶碗の出土量は多くない状況のままであるが、調理具・貯蔵具では常滑系特殊品に代わり瀬戸系の特殊品が増加し、卸皿や捏鉢など小中形、常滑系甕など大形雑器類が出現して生活用具が多様化したことを指摘する。そして、ようやく全域に東濃系山茶碗が普及したのが14世紀以降という。

こうした状況に、実は地域の食習慣に強く根差した「調理具」と「食器」に対する需要(受容)の違いが読み取れるであろう。東海地域外でみ

られる山茶碗は、特殊な事情を除いて、おそらく「道具」の機能を伴わない「碗の形をした器」として持ち込まれたものと考えている。

「調理具」ならばより効率的な製品や技術の成立、調理方法の変化など、「食膳具」ならば材質、嗜好、食事形態の変化など多様な要因が複合的に関連し合うことによって、器種・法量分化への指向が顕在化していく。

山茶碗の機能のうち「碗」と「道具」が分離したとき、ある地域では「食膳具」の「碗」として再び採用され、別の地域では食膳具を他に求めて使用そのものを停止した(註21)。

消費地の側からの視点の必要性はかねてより示唆されてきたが(註22)、中世後半期の山茶碗流通をめぐる地域差について、また等量(等価)の代替品が見出せないという現象が成立した背景に、このような解釈の方向性を提示しておきたい。

註

「碗」「碗」の用字について、本稿では引用部分を除き「山茶碗」を使用する。

- 1) 赤塚幹也 1966『陶器全集19 古瀬戸』平凡社。
- 2) 赤塚幹也 1969『瀬戸市史 陶磁史篇一』。
- 3) 赤羽一郎 1987「山茶碗に関する若干の考察」マージナル7。
- 4) 鋤柄俊夫 1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4。
- 5) 藤澤良祐 1990「山茶碗と中世集落」『尾呂—愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』、1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要3』三重埋蔵文化財センター。
- 6) 城ヶ谷和広 1991『土田遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集。
- 7) 尾野善裕 1996「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について」中近世土器の基礎研究XI。
- 8) 柴垣勇夫 1985「山茶碗と白磁碗について」『愛知県当時資料館研究紀要』4。
- 9) 四柳嘉章 1996「漆器考古学の方法と中世漆器」考古学ジャーナル401、四柳1995「漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、北陸、関東以北においては11世紀以降、量産型の渋下地漆器の流通が確認されている。
- 10) 小池一徳 1995「大毛沖遺跡出土の墨書陶器」『平成6年度 年報』愛知県埋蔵文化財センター。
- 11) 下津北山遺跡より「僧」「佛」、土田遺跡より「進上」「犬法師」墨書が出土している。
- 12) 武部・鈴木「第3部1-5 中世以降の土器・瓦」『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター(第90集)。
- 13) 外面口縁部周辺にも摩滅が確認できるものがある。顕著なものは内面口縁部周辺も同様にみられるため、こちらに含めて考えたい。
- 14) 三辻利一・岡本直久 1995「山茶碗の流通—3・4型式を中心として—」『研究紀要第3輯』瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 15) 早野浩二 2000『下津北山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター(第88集)。
- 16) 三重埋蔵文化財センター 1994『研究紀要3』、中世土器・陶器編年研究会記録 2004「東海地方山茶碗研究の現在と課題」文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究』、岡本直久 2005「山茶碗(山茶碗編年の現状について)」『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』資料集文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究』。
- 17) 多治見市教育委員会 2001『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』。

18) (註7) 尾野に同じ。貿易陶磁はどこでも遺跡出土遺物総量(破片数)の約1パーセントとなるが、実は山茶碗を基準とした割合でみると集落間の格差が明瞭にあらわれる。また、碗・皿以外の器種の有無に格差は明らかとなっている。

19) 青木 修 1993「片口鉢の研究—中世知多古窯跡群を中心として—」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要1。

20) 服部 郁 2000「瀬戸区の中世窯・中世瀬戸窯の分布」瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要XVII、岡本直久 2004「猿投・瀬戸窯」中世土器・陶器編年研究会記録「東海地方山茶碗研究の現在と課題」文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究』。

21) 鋤柄俊夫 1991『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社 第一章第四節二「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」。

22) 緻密な胎土を用いて滑らかな器壁をもつ東濃型山茶碗の量産、拡散期は尾張型第6型式段に重なっている。この時期から専ら「食膳具」の碗として改めて生産が継続されていったのではないか。東濃型山茶碗の三重県での流通状況については次のような解釈がある。前川余嘉宏 1994「三重県における山茶碗の出土状況」研究紀要3 三重県埋蔵文化財センター、「伊勢国の北部では、需要さえあれば尾張型第7型式と併行する時期から大量生産が」始まった東濃型山茶碗を搬入することは地理的に充分可能であったと考えられるが、そういった形跡は全く認められない。また、中世土師器の大生産地であった南伊勢においては、需要さえあれば山茶碗に替わる碗形態の土師器を大量に生産することは容易であったと考えられるが、そういうこともなかった。つまり、これらの地域では、山茶碗供給の減少がきっかけであったかもしれないが、急速に碗形態の焼物使用から脱却し、鎌倉時代の中頃には既に、日常生活において碗形態の焼物を必要としなくなったと考えられる。

23) 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要3』三重県埋蔵文化財センター、「山茶碗の流通時期の相違は、流通上の問題ではなく山茶碗の需要そのものの問題で、山茶碗が東海地方の主要な日常食膳具であったとすると、山茶碗が食膳具としての地位を失う時期には地域差があったことを意味している」。

参考文献

尾野善裕 1997「東海・濃飛」『中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第71集。

尾野善裕 1990「白磁Ⅴ類碗模倣の「山茶碗」とその周辺」『考古学フォーラム1』。

宮本馨太郎 1973『めし・みそ・はし・わん』岩崎美術社。

鋤柄俊夫 1999「挿鉢が語る食文化—中世考古学の窓から—」柴田ブックス『味噌』柴田書店。

愛知考古学談話会 1987<特集>山茶碗窯『マージナル』no.7。

岐阜県文化財保護センター 2005『柿田遺跡』報告書第92集。

多治見市教育委員会 2001『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』。

多治見市教育委員会 1993『小名田小滝古窯跡群』。

春日井市教育委員会 1971『白山中世遺跡』発掘調査報告書第5集。

愛知県埋蔵文化財センター 1987『土田遺跡』調査報告書第2集。

愛知県埋蔵文化財センター 1991『土田遺跡Ⅱ』調査報告書第23集。

愛知県埋蔵文化財センター 1992『朝日西遺跡』調査報告書第28集。

愛知県埋蔵文化財センター 1994『松河戸遺跡』調査報告書第48集。

愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』調査報告書第90集。

愛知県埋蔵文化財センター 1996『大毛池田遺跡』調査報告書第72集。

愛知県埋蔵文化財センター 2000『下津北山遺跡』調査報告書第88集。